

ハイド・アンド・シーク 暗闇のかくれんぼ

2005(平成17)年3月2日鑑賞(試写会・大阪厚生年金会館芸術ホール)

★★



監督＝ジョン・ボルソン／脚本＝アリ・シュロスバーグ／出演＝ロバート・デ・ニーロ／ダコタ・ファニング／ファムケ・ヤンセン／エイミー・アーヴィング／エリザベス・シュー／ディラン・ベイカー (20世紀フォックス映画配給／2005年アメリカ映画／102分)

……ホラー系スリラー映画の嫌いな私がロバート・デ・ニーロとダコタ・ファニングの2枚看板見たさ(?)に試写会に臨んだが……? この手の映画は「脚本がすべて!」ということはわかるが、これでもか、これでもか、と脚本家の世界に無理矢理(?)引きずりこまれていくのはいい加減うんざりで、疲れるもの……。さて、「背筋が凍るラスト15分」とは……?

「売り」は背筋が凍るラスト15分!

私はこの映画の予告編を2回観た。ロバート・デ・ニーロとダコタ・ファニングという2枚看板を表に出して、「もう、いいかい?」「まあだよ」「もう、いいかい?」「もういいよ……」という「かくれんぼ」遊びを軸に描いたホラー系のスリラー映画ということは一目瞭然だが、何といてもこの映画の「売り」は「背筋が凍るラスト15分」というもの。果たして、そのラスト15分とは……?

もちろん、それをここで紹介することは不可能。「結末は絶対に教えないください」と厳命されているから……。

最近多い(?)二重人格の映画……?

『シックス・センス』(99年)の大ヒット以来、最近は本格的ホラー系スリラー映画(?)が多い。『アンブレイカブル』(00年)も『ヴィレッジ』(04年)もそうだし、ジョニー・デップ主演の『シークレット・ウインドウ』(04年)もそうだ。こういう映画は、あっと驚く逆転の発想とあっと驚く結末が用意されている

ことが不可欠だから、いかに頭を捻って逆転の発想ができるかが勝負となる。その結果、「生きていると思っていた人間が実は死者だった！」とか、「AとBは実は同一人物だった！」というパターンが多い。後者のために便利(?)なのが「二重人格」だが、『シークレット・ウインドウ』は完全にそのパターン。

そして、この手の映画の脚本家と監督の腕の見せどころは、あらかじめ用意された(脚本化された)筋書きを、いかに注意深く緊張感をもって観客に観せることができるかということになる。したがって、結末に至るまでの「導入部」が長すぎてもダメだし、途中の物語の展開も複雑すぎてもダメだが単純すぎてもダメ。さらに、ヒントがなければダメだしそれが多すぎてもダメ。その点、この映画は……?

主役は父と娘の2人

この映画の主役である デビッド・キャラウェイ (ロバート・デ・ニーロ) と エミリー・キャラウェイ (ダコタ・ファニング) は父と娘。映画の冒頭だけ母親のアリソン・キャラウェイ (エイミー・アーヴィング) が登場し、仲の良い母娘のシーンが描かれるが、そのアリソンはバスタブにつかったまま、お湯を血で真っ赤に染めて自殺。このショックのためエミリーは精神的に不安定となり、精神科の治療を受ける羽目に……。担当医のキャサリン (ファムケ・ヤンセン) とは仲良しになれたが、他の人には全く心を開かなくなったエミリー……。このことに心を痛めたデビッドは、母親との思い出のつまったニューヨーク中心部にあったマンハッタンの家から郊外へ移住し、娘と2人だけの生活をすることによって償おうとしたが……。

こんなダコタ・ファニングが好き?

『アイ・アム・サム (I am Sam)』(01年) や最新の『マイ・ボディガード』(04年) で名演技を見せた天才子役のダコタ・ファニングは、日本でいえばさしずめ数年前の安達祐実というところ……? テレビドラマ『家なき子』で、一世を風靡した「同情するなら金をくれ!」の名セリフを生んだ安達祐実は、逆境にも負けず生きていく少女「すず」の役だったが、彼女はもともととびきりの美女。そ

れと同じく、1994年生まれで、6歳から女優としてのキャリアを開始したダコタ・ファニングもすごい美少女。ところが、そんな美少女がこの映画では……？パンフレットには、「スリラー初挑戦！ 新境地に挑んだダコタ・ファニングの名演技」とある。たしかに、精神的にバランスを失った女の子役をうまく演じているから、名演技には違いないが、さて、あなたはこんなダコタ・ファニングが好き……？

チャーリーって誰……？

母親の自殺のショックで精神的にヘンになってしまった（自閉症？）エミリーの唯一のお友達は、女の子らしくお人形さんだったが、ある時以降これがチェンジし、チャーリーというお友達の名を挙げるようになった。児童心理学者のキャサリンの分析によれば、これはエミリーが心の中で作り出している架空の友人とのこと。たしかに考えられそうなことだ。そして、孤独な（？）エミリーは時々このチャーリーとかくれんぼをして遊んでいた。それだけならよかったのだが……？

ニューヨーク郊外の一軒家は？

この映画の舞台は、ほとんどキャラウェイ父娘が引っ越したニューヨーク郊外の一軒家。ちょっと古そうだが、広くて立派な家。全人口約2000名の町という設定だが、町の治安のためハファティ保安官（ディラン・ベイカー）がいる。また、引っ越した日にはお隣さんからあいさつも。そして、デビッドは離婚したばかりの1人の女性エリザベス・ヤング（エリザベス・シュー）と出会い、ある種の感情も……？ こんなのんびりした環境下でゆったりと父娘2人が暮せば、エミリーの精神状態もよくなるかもと期待されたが……？

私としては、ニューヨーク郊外のこんな家がいくらで買えるのか、また、最近日本で問題となっている欠陥住宅問題のように、もしこの古家に欠陥（民法570条の「隠れた瑕疵」）があったらどうなるのか、など都市問題や法律上の興味はいろいろあるのだが、この映画ではそんな問題は全く無視。脚本家が狙っているとおり、この家の中では次々と不気味な出来事が……？

一軒家選びは隣人がポイント！

「マンションは管理を買え」と言われるのに対し、一軒家選びのポイントは隣人だ。いくらいい家でも隣に住むのがヘンなヤツだったら、と思うとゾットするはず。キャラウェイ父娘が引っ越してきた翌日、隣人の奥さんがジャムを持ってあいさつに現れ、その人柄を見てデビッドは安心した。ところが、その亭主がちよっとヘン……。愛する娘を亡くし、悲しみにくれていた隣人夫婦は、隣に引っ越してきた可愛い娘エミリーを見て、思わず……。そんな中、疑念が疑念を生み……。スリラーものつくり方の工夫がここにも……。

いい加減疲れる「びっくりさせよう演出」！

この映画では、夜中の2時06分がコトのおこるポイントの時刻。ポタリポタリと水のしたたり落ちる音を聞いて起き出したデビッドが、バスルームで自殺したアリソンを発見したのがAM 2:06だった。その後、引っ越しした一軒家でも、次々とおこる奇妙な出来事はなぜかAM 2:06。おかげで、この映画を観た日、夜中に目が覚めた私が思わず時計を見たら、何とAM 2:06だった……。ホンマかいな……？

そんな時刻もさることながら、「かくれんぼ」がテーマだから、誘うようにドアが開き、「どこに隠れているのかナ」と軽口をたたきながら、ベッドの下を覗いたり、タンスを開けたりしているうち、ついに！ この間ずっと思わせぶりの音楽が流れ、ハイライトシーンでは瞬間的に大音響も……。こりゃ、観ていていい加減疲れてくるはず。まして、同じような「かくれんぼ」が、手を変え（場所を変え）、品を変え（人を変え）、2回、3回と演じられると、「びっくりさせよう演出」はもうコリゴリという感じ……。オレはやっぱり、ホラー系スリラー映画には向いていないと痛感！

2005(平成17)年3月3日記